

山口市文学碑巡り (NO.1)

宗祇句碑と連歌

萩往還を旧市内に向かって下り、木町橋から大市札ノ辻に至る道は**豎小路**と呼ばれ、大殿地区で過ごしたことのある人には馴染み深い地名でしょう。南北に延びる豎小路の真ん中付近に**八坂神社**が赤い大きな鳥居を構えて建っています。その境域の北西の隅に句碑が建っています。大内氏が山口を政都として栄えた時代に、都から招いた**宗祇の句**で、その句碑の場所は、豎小路に面してその境域に土塁のような築地が残っておりその内側に「**築山殿跡**」の案内が建っている場所が目印です。宗祇が初めて山口を訪れたのは「文明十二の年の水無月のはじめ周防国山口といふに下りぬ」と彼(宗祇)の「**筑紫道記**」にあり、1480年10月初旬のことだと伝えられています。招いたのは大内氏 29代当主の**大内政弘**です。「**築山御殿**」で催された大内政弘主催の行事で、政弘の要望に応じて詠んだとされる句で「**池は海こずゑは夏の 深山かな**」と刻まれて、築山御殿の池を配した壮大な庭園を詠んだものとされています。句碑は高さ4尺2寸(約1.2m)巾5尺2寸(約1.5m)厚さ1尺7寸(約0.5m)台座の上に建つ全長6尺5寸(約1.9m)の花崗岩で作られており、この句碑の作成は昭和28年(1953年)で、有志の会が建立したものだそうです。大内時代の連歌の催しを物語る場所がもう一か所。米屋町商店街から一の坂川左岸に出て、みずほ銀行と山口銀行の裏あたりに「**笠置堂跡**」があります。「**御連歌所**」として6月7日から13日までの**祇園社の祭日**に、この地の茅葺の笠置堂で毎夜100句の連歌、7日間合計で700句が詠まれていたと説明版に記されています。

宗祇句碑



笠置堂跡



(76期 厚東一生)